

詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

地下鉄、大阪

野瀬町
水沢 郁

ふるさとの町の公園にある築山は
地下鉄を掘ったときの土でできている
市はついでに火葬場も作ったの

運河まで歩いて五分

ベイエリアまで鼻唄交じりの散歩

ひと足夕日ふた足夕闇

山には躑躅があるわ

いつも魚のはらわたみたいな薄煙を吸い込んで
初夏を思つて生きている

市営団地の一部屋の

鉄の扉をドンと叩かれて

ここまで何百里

それがいやだと言うのなら

わたしは地下鉄の土にもどりましょう

死んでももぐらにはなりませぬ

(評) 故郷の「その場所」は活き活きと人の五感や生きていく時間へと繋がっていき、自由な言葉の世界が繰り広げられる。読者の想像力を喚起する不思議な魅力と作者の力量を感じさせる作品である。

特選

傘について

正法寺町
高井 豊

ひらけば

やはり傘なのであった

音楽や物語り

ましてや突然の明日が生まれることなどない

それでもひとは

傘をひろげるとき

ほんの少し期待に似た思いをもつのは

そのやさしい半円の

ふくらみのせいなのか

ずぶぬれの辱しさを

わずかに切りとる空間

風の通りぬけを守る

ささやかな庇

傘をもっている

それだけで

一歩が踏みだせることだつてある

病んだ空で胸もとが

おおわれているときはなおさらだ

雨で煙る足もと

かすむ向こう側

押しよせる寂しさをとどめ

己を抱くようにして

一本の支軸を握る

(評) 傘の持つ特別な空間について思いを馳せていくと、外界から防御してくれるものの大切さが柔らかな静かに浮かび上がってくる。見過ごしがちな存在に気付く過程を、深く思索的に綴っている。

特選

洗う

冷たい水で
 硯を洗う
 星空の下の水で
 硯を洗う
 手の神経が
 ビーン ビーンと
 かすかにふるえている
 琵琶湖に流れる
 小さな川のそば
 夜風が髪をゆらす
 冷たい水で
 筆を洗う
 指先を軽やかに
 動かしながら
 筆をていねいに洗う
 一枚く
 半折に硯をこめて
 向かった その筆を
 冷たい水で
 ふるえながら しかし

芹川町
 日比野美鈴

充実した心で洗う
 硯と筆と
 わたしの心を

(評) 一心に墨の世界に浸った後で、丁寧に硯や筆を洗う。その単純な行為を素直に書いていきながら、一行一行の簡素さから作者の清新な気持ちがよく伝わり、祈りに似た時間を感じさせる。

入選

雪虫

西今町
 谷口明美

寒い朝
 とどけものをたずさえ訪れると
 その人は
 渋いオーカーの大きなシヨールに
 すっぽりと身をくるみ
 なぜか満ちたりた表情で
 迎えてくれた
 いま 句をつくっていたの
 雪虫を見つけたの
 初めて耳にするこの名に
 いぶかりながらも

わたしは素直にうなずいた

その時 玄関先を
 見逃してしまいそうな
 小さなひと粒が
 木立の茂みに動いていく
 じつと目を凝らすと
 一ひらの雪からはぐれたような
 三ミリもない純白は
 しきりに翅をうごかしている
 生きている
 飛んでいる

それなのです
 と笑んだ

学名にはなかった
 だれもが素朴に呼んでいそうな
 この名を はじめに
 風流な季語にうたったのは
 だれだろう
 その人は
 このかすかな生きものを
 どんな言葉につつむのだろうか
 こたつの中で

(評) 「雪虫」という未知の美しさに出会った時、
作者は教えてくれたその人の有り様や感性、そ
の人の作る世界までを含めた美しさに触れ、反
芻し、それが作品をより豊かなものにしていく。

入選

稲株の変奏曲

東近江市
前川 利孝

機械でみるみるうちに
刈り取られる黄金色の稲穂
切り株から青い涙が出ている
縦笛でソロ演奏だ
少し時間が経つと切り株は
一面血の色に変わる
同じ時期
畦道には曼殊沙華の芽が噴き出した
紅色の競い合い
打楽器での協奏だ
半月もすると切り株は薄茶色に枯れ
ある日白サギの群れが虫をあさって停泊した
広い田んぼは真っ白に変わる

オーケストラでの合奏だ

白サギが去り
静かな圃場に戻り
切り株は深い茶色になる
何日か経つて
切り株跡から
次々と新しい芽が出る
一面が緑
次世代の芽吹き
自然界のメタモルフォーゼ

今の自分にとつて
こんな変奏曲を聴くのが楽しみだ

(評) 稲が刈り取られた後の田圃の変化を、色や形
だけでなく変奏曲にしていくという発想が斬新
で面白い。景色の中を本当に音楽が流れていく
ようで、作者が経験を重ねてきた田圃への愛情
が優しく感じられる。



入選

あした たびにでる

西今町
やまかみまさよ

近頃 無意識に唱えている
キヤベツを、タマネギを、春菊を
日々 切り刻みながら
お経本はいつからか閉ざしたまんま
断舍離 ダンシヤリ ダンシヤリ…と
おしゃれにも めざめてきた
ジムに通いはじめたのでもなく
衣服が派手になつたのでもなく
歩く姿勢と歩巾を ちよつとね
しゃなりしゃなり しんなり はんなり
キヤツシユレスの時代になつてきて
レジで小銭を探し数えているおばさん
若い人のイライラ視線が 丸めた背にチクリ
それでもゆつくり じつくり
つめに火をともして暮らしている
だからマニキュアは もうやめた
でもちよつとお洒落な洋服 つめ込んで

明日 どこかにでかけよう
伸びた爪を切って決心する ゆうべ。

(評) 老いと共に湧き上がってくる様々な思い。私もあなたもシンプルに自分らしく生きて、より素晴らしい明日を見つけないければ！平凡な暮らしの中で何度決心するだろう。リズムカルな表現が作品を軽やかにしている。

入選

むくろ

南川瀬町

谷 敏子

玄關の両脇に植えられた二本の桜
花のトンネルができていた
家路に着いた時日が落ちて
部屋の中は薄暗かった

電気は点けずにいよう
窓は開け放ち
花の香りを部屋一杯に入れよう
今宵は満月なのか
煌々と照らされる月の光の中に
暫く身をおいた

月から見下ろせば

地上の醜い争いも

四季折々の移ろう自然も

ましてや

自分の名も苦しみも

知る由もないだろう

医師の言葉を繰り返し

呪文のようにいつてみる

余命半年

いつどこから入って

私の体に住みついたのか

コロナと同じで見えやしない

言葉にならない悲しみが

心におちて

風もなく

心の中になごりの雪が降るように

桜の花がひとひら ひらり

桜の花は白くなくても

また

青葉が伸びる

限られた時間に

まだ

針は回るかもしれない

(評)

余命宣告という厳しい現実を、さくらや月の光の中に身を置くことで、悠久の時間の中の切なく美しい物語として昇華していく。嗅ぐだけでなく、希望を持つという終連の姿勢にエールを送りたい。

佳作

影踏み

南川瀬町

横谷 沙智

佳作

静かな癒し

古沢町

真野 美栄子

佳作

一粒の梅干し

彦富町

池田 光雄

佳作

戦争をやめるべし

岡町
宮地 正子

佳作

ごめんなさい、 もうあなたしか 希望がないんです

犬上郡豊郷町
藤田 始 宏



《総評》

選をさせていただきながら、ふと手の止まる時があります。「私は何を基準に作品の順位を決めているのだろうか?」。創作意欲を高めて、より素晴らしい詩を書いていただくための応援であることが、安易な決めつけや高慢に繋がらないようにしなければと、気持ちを引き締めます。特選と選外の詩の間にあるものは言葉の選択力や洗練、感性の豊かさなど様々な要素で判断していきますが、選ばれなかった詩にも、印象的で深く心に残る一行があったり、とても大切な視点を持っておられたり、お会いできれば「ここが素晴らしい!」とお伝えしたい作品がいくつもあります。優れた芸術論を展開する岡倉天心の「茶の本」の中に「傑作には、人の心の温かな流れが感じられるのに対して、凡作には、ただ、形ばかりの表現しか見当たらない」(大久保喬樹訳)という記述があります。百年以上前に書かれたものですが、時間を超えて私たちを深く頷かせます。

尾崎 与里子

選者吟

約束

石内 秀典

幾重もの枯れ葉の中に
いくたびか
埋めてきた
約束の言葉
それらは落葉の中で
発酵するまでの時間
眠り続けるだろう
風が
ゆるやかに
流れ
やがて
光りになる頃
言葉は
空に架かるだろうか
大切な
遠い青空を
少しずつ切り取っていく
約束ということ

貴方は
まだ
青空のどこかに
掛かっているか

からすのえんどう

尾崎 与里子

長く住んでくださった人が引越されて
結婚して私たちが最初に住んだ家は
空き家になった
私たちは隣町へ移って四〇年になる
母屋の奥の暗い小さな家だったのが
二〇年前に母屋を取り壊し
周囲の家々も老朽化や無人化で姿を消し
いつのまにか
明るく風通しの良い古家になっていた
躑躅や踏み石のある庭だったのも
途中で芝などを植え
あまり手入れをしなかったものだから
芝の根に負けない雑草や野花が咲き競い
雑木が重なりあうように枝を伸ばして
すっかり自然の庭に戻っていた

家の中で懐かしいものを見つける
若い頃は
辛くて許せないことばかりだったのだ
縁よがに触れると
今ならもう少しおおらかに処せただろうに
と思う
私は私でありたいと
そのことばかりが時間を占めて
さまざまなかたちで私を侵食するものと
闘い続けていた

私は私を見つけたのだろうか
見つけたような気もするし
ただの我儘だったようにも感じる

ブルーブラックの孤独

山本 英子

窓の外には大きな空があった
「あの人に知らせてあげようか」とわたしは
言ってみた
彼は肯定も否定もせずわずかに微笑んだ
それが最後の見舞いになった

いち日

列車を乗りついで
わたしはあの人の住む町へ行ったのだ
あの人が義父の車椅子を押し
椿の沼の前に長く立ち
やがて帰っていくのを見送った
あの人はわたしに見られ続けていたことに
気づかず
一度いぶかるように振りむいただけだった

あの人は知らない
わたしがあの人を知っているの知らない
もはや存在しない彼が生涯あの人を静かに
抱きしめていたことを知らない

※

彼は知らなかった
落花する赤い椿の血の沼に
透き通りながらあの人が
彼への思いを落としていたことを

